
BLUE BLOOD ~二つのプレスレット~

白鳥炎応

注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

【小説名】

BLUE BLOOD〜二つのブレスレット〜

【Nコード】

N8115C

【作者名】

白鳥炎応

【あらすじ】

両親を失い花を売って生計を立てるシルヴィは、ある日花を売りにいった港で幼い頃に生き別れた兄・ユベールと再会するが・・・
12月22日更新！最終話です。

第零話：墓前（前書き）

この小説の原案と執筆についてのアドバイスをして下さいました春野天使先生、同じくアドバイスをして下さいました貴水玲先生、ジョン先生、そして読者の皆様に感謝いたします。ありがとうございます。

第零話：墓前

気持ちの良い風が吹く、小さな丘に立つ灰色の石。

石の前に立つのは、稲穂によく似た金色の巻き毛に青い瞳をした美しい娘。

娘は石に刻まれた文字をなぞりながら、目を潤ませた。

石には『ユベール・エラクレア、ここに眠る』と刻まれていた。

「シルヴィー！」

澄み切った声で自分の名前を呼ばれた娘　シルヴィー・エラクレアは青い瞳からこぼれそうな涙を指で拭くと、立ち上がって声のした方へ顔を向ける。

「ジル。」

「お…おはよう！」

シルヴィーの目の前に立つ青年　シルフォード・フローレンスは、彼女と同じ色をしたくせのある短い髪にこれまた彼女と同じ色の瞳をしていた。

「綺麗な百合の花、あなたが選んでくれたの？」

「あ…ああ。お前みたいにセンスないから自信ないけど。」

シルヴィーはシルフォードが両手に抱えている花束を覗くと、嬉し

そつに青い両の瞳を細めた。
雪のごとく白い百合の花束は、朝露をきらめかせ生き生きと咲いていた。

「本当に綺麗ね、ユベールも喜ぶわ。」

シルヴィがジルフォードから花束を受け取り石の前にそつと置くと、再び腰を下ろして両手を組んで瞳を閉じた。

自分の兄 ユベール・エラクレアが眠る墓の前に。

ジルフォードもシルヴィに倣^{なら}う。

しばしの静寂。

風が青い草原をなぞっていく。

シルヴィとジルフォードの髪も、風になぞられる。

「…ありがとう、来てくれて。」

シルヴィは瞳を開いて立ち上がると、金色の巻き毛を手で掻き上げながらジルフォードにお礼を言った。

「…俺はお前の兄貴を助けることができなかつた。だから自分ができることをしているだけだ。礼を言われるようなことはしていない。」

ジルフォードは哀しそうな顔で、言葉を紡いだ。

どれだけ言葉を紡いでも、失った命を取り戻すことはできない。自分がした事が正しいことさえわからない。

どのような状況であれ、自分が人を殺めたことに変わりはない。

「本当にすまな…」

「謝らないで、私も兄もあなたに感謝しているわ。」

シルヴィが持つ何本かの細い指が、ジルフォードの唇を塞ぐ。

「兄を救ってくれたのは、あなたなの。私を救ってくれたのは、あなたなの。だから、だから……！」

シルヴィの両の瞳から涙が、いくつもこぼれる。

涙を拭おうと伸ばした手はジルフォードに引っ張られ、そのままシルヴィの身体はジルフォードの胸の中に飛び込んだ。

何も言わずに自分の身体を抱きしめるジルフォードの心地良い体温を感じた時、シルヴィの中で何かが外れた。

シルヴィもジルフォードの背中に手を回すと、嗚咽の声を上げ始めた。

第一話・予感（前書き）

少し書き直しをしました。あまり変わっていないかもしれないですが読んで下さったら幸いです。

第一話：予感

話は一年前に戻る。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

白く光る眩しい日光が、窓から差し込む簡素な部屋。

少々肌寒い風が吹き込み、ベッドから身体を起こしている人物の背中まで伸びる下の位置で髪ゴムで結われた黒く長い美髪を風ぐ。

「ドクターストップだつてさ、ははは…」

ベッドから身体を起こしている人物　セイロン・フローレンスは、力無い笑みを浮かべながら自分の目の前にいる息子・ジルフォードに『降参』を表すように両手を上げた。

右手と右腕は健康的な肌色をしているが、左手首から左肘そして頭部に巻かれている白い包帯が痛々しい。

ジルフォードの父親であるセイロンは女性と見紛う程艶やかな容姿に加え、息子と変わらないほど若い容姿をしている。

これはセイロンが風の大精霊シルフェと契約した際に『時』を代価として差し出したため体内年齢が止まっている、つまり老化現象が止まっているためである。

そのためセイロンの実年齢は五十二歳になるが、外見の年齢はジルフォードと同じ年齢である二十二歳と変わらない。

「頼むから病院を抜け出さないでくれよ。」

「大丈夫！大丈夫！」

屈託の見当たらない笑顔を見せる父親を信用できずにいるジルフォード。溜め息を吐かずにはいられない。

「心配しなさんな、ジル。」

ジルフォードに話しかけた美人女医　アリオシュ・アリーは、白衣を身にまとい黒曜石を溶かしこんだような黒色の長い髪をシニヨンにまとめていた。

彼女は銀色縁取られた眼鏡の位置を片手で上へ動かした後、もう片方の手で持っている人參程の太さと大きさの注射器をジルフォードとセイロンに見せた。

「あつああああアリオシュそれはままままままかさか…！」

「そう！あんたが考えてる通りだよ、セイロン。病院を抜け出した

らあなたに打つ！どこまでも追いかけるから覚悟しな。」

アリオーシユは眼鏡の奥に光る翠玉の瞳を楽しそうに細めた。

「嫌だあああつ！打たないでええええつ！お願いいいいいつ！」

セイロンは両手を合わせてアリオーシユに懸命に懇願した。

それぐらいセイロンは注射が大の苦手なのだ。

「あまりにうるさく騒いでも注射して下さい、アリー先生。」

そうアリオーシユにお願いをすると、ジルフォードは踵を返した。アリオーシユはにやりと笑って同意した。

『嫌だあああつ。』と叫ぶセイロンを病室に残し、ジルフォードは病院を後にした。

彼が目指すは、ミユステリオン王国郊外にある田舎町・ゲインズブル。

ゲインズブルに、一人の美しい娘が住んでいた。

彼女の名前はシルヴィ・エラクレア。

蒼穹のごとく青い瞳に、金髪の豊かな巻き毛の美しい娘。

シルヴィは母と二人で小さな花屋を営んでいたが、その母も二年前に病で亡くなった。

今は一人で細々と花屋を経営している。

二十一歳になるシルヴィは、町の青年達から何度も求婚を受けるが、いつも頑なに断っていた。

シルヴィは、両親が開いた花屋を閉めたくはなかった。それに……もし自分と血を分けた双子の兄・ユベールが帰って来た時、家がなくなっていては困ると考えたからだ。

シルヴィは左手首のブレスレットを見つめる。

淡い桃色の小さな石のブレスレット。

決して高級な品ではないが、シルヴィにとっては宝物だった。

朝露に濡れた色とりどりの花々を、シルヴィは一つ一つ丁寧に摘み取っていく。

愛情を込めて育てた花達は、スクスクと大きくなり美しい花を咲かせ始めている。

両親が作った広い花畑。一人で花の管理をするのは大変だが、シルヴィは毎日夜の世話を怠らなかった。

ひとりぼっちになったシルヴィにとって、花達は家族のようなものだ。

シルヴィにとっても大切な存在だ。

大きな籠にその日摘んだ花を詰め込み、両手で抱え上げた。

これからお店に持って帰り、飾らなければならない。花屋の仕事は体力がいるのだ。

「シルヴィ、シルヴィ！」

店に戻る途中で、隣りに住む中年の女性に声をかけられた。

「おはようございます。」

シルヴィは笑顔を向ける。母の友人だったその女性は一人になっ

たシルヴィを気遣い、いつも優しくしてくれていた。

「後でお花を届けに行くわ。」

「いつもありがと。シルヴィ、さっき聞いたんだけどね。どうやら戦争が終わったようだよ」

「戦争……?」

海の方こうにあるフィアールカ王国で戦争が行われていることは知っていたが、戦争に無縁のゲインズブルでは別世界の出来事だ。シルヴィは特に気にも留めていなかった。

「ああ、港の方には戦場からひきあげた兵士達がたくさん入って来ているようだ。」

「そうなの？ 戦争が終わって良かったわね。」

「いいもんか。隣国じゃ食糧不足、飢えた野蛮人達がうようよしてるんだよ。あんたのような若い娘は特に気をつけた方がいい」

「でも、みんなが悪い人って訳じゃないでしょ？ 戦争で傷ついた人達を助けてあげたいわ」

「ダメダメ！ 何言ってるの。港には絶対近づいちゃダメだよ。あんたも狼の餌食になっちゃう」

お人好しなシルヴィに、女はあきれ顔で強く言った。

「分かった」

シルヴィは素直に答える。
しかし、いつもより賑わっている港で花を売れないのは少し残念な気もした。

「あっ！」

思わず手が滑り、シルヴィは花瓶を床に落とした。
大きな音とともに、花瓶が碎ける。

「あーあ、お気に入りの花瓶だったのに……」

いつもテーブルに花を生けているガラスの花瓶だ。
シルヴィはガラスの破片を素手で拾おうとする。

「痛っ……」

鋭いガラスの断面で、左手を切ってしまった。
じわじわっと血が流れ左手首に伝って流れる。
手首にしているブレスレットに赤い血は流れ、淡い桃色のブレスレットを赤く染めた。

やだ。ブレスレットが。

手の痛みより大切なブレスレットが気になり、シルヴィは慌ててブレスレットをはずした。

その瞬間、ブレスレットが切れて、桃色の小さな石の粒が床に散らばった。

「……………」

床に落ちたガラスの破片、ブレスレットの小さな石、手首から流れた血がポタリと落ちて赤い染みを作る。

胸騒ぎがする。

シルヴィは床にしゃがみ込み、散らばる石の粒を黙って見つめた。薄い桃色の小さな粒たち。

シルヴィは床に散らばる石の粒を一つ一つ拾い集め、そっと手のひらに置いていった。

シルヴィの手の中で、石の粒は柔らかな桃色に輝いている。

「ユベール……………」

優しく手を閉じて、石の粒を握る。

今どこにいるの？早く帰ってきて……………もうすぐ私たちの二十二年目の誕生日が来るわ。　　また一緒に誕生日を祝おうって言ったじゃない。

シルヴィは目を閉じ、ブレスレットの粒に話し掛けるように心で語った。

シルヴィには双子の兄がいる。
名前をユベールという。

シルヴィと同じ金色の髪に青い瞳の綺麗な子供。

シルヴィとユベールは花屋の夫婦の元で、慎ましくも幸せな日々を送っていた。

しかし、シルヴィとユベールが五才の時から、その幸せは暗い陰を落とし始めてくる。

その年町を大嵐が襲い、シルヴィ達の花畑も大きな被害を被った。両親は、花のなくなった畑を一から耕し、元のような畑になるよう努力した。

その甲斐あって、どうにか花畑は復旧し、以前のような美しい花々を咲かせられるようになった。

だがその直後、更なる不幸が一家を襲う。元々持病のあったシルヴィの父が病に倒れ、あっけなくこの世を去ってしまったのだ。

悲しみに打ちひしがれる間もなく、母親は生活のため、畑仕事と花屋の仕事に専念する。

六歳になっていたシルヴィとユベールも、出来る限りの手伝いをしようと努力はしたが、まだ幼い双子のことあまり労力にはならない。

被害を受けた町の人々も、花を買う余裕がなくなり、シルヴィ一家の生活は益々苦しくなっていた。

今日食べるパンさえない日が続いたある日。シルヴィの家に一人の男が訪ねてきた。

大事な話があるからと、シルヴィとユベールを外にやり、長い間話し合っていた。

その日はちょうど、シルヴィとユベールの七歳の誕生日だった。

「あのおじさんは、わたしとユベールのお誕生日を祝いに来たのかな？」

窓の外から家の中を覗き見ていたシルヴィは、隣りのユベールに尋ねる。

「そうかもね。ほら、おじさんがお母さんにお金を渡してるよ。」

「本当だ！でも、お母さんは何で泣いてるの……？」

シルヴィとユベールは顔を見合わせ首を傾げる。それからしばらくして、泣き濡れ目を腫らした母親が、二人の元に現れた。

「今夜、みんなで港に行きましょう……」

母親は静かな口調で二人に言う。

「わあ、嬉しいな！ 港はお店やお船がいっぱいだよ。」

「お母さん、わたしたちの誕生日のお祝いに、港に連れて行ってくれるの？」

シルヴィもユベールも、目を輝かせて母親を見上げる。

「……そうね。」

母親は笑顔を作ろうとするが、うまく笑えなかった。

そして、いきなりユベールを抱きしめた。

「ユベールはお船が大好きよね？」

「うん」

きよとんとしながらも、ユベールは母の胸に抱かれて頷く。

「今夜、おじさんと一緒にお船に乗れるわよ……」

「えっ！ ほんと！」

嬉しがるユベールを母親はきつく抱きしめる。

もうそれ以上言葉が続かなくて、ユベールを抱きしめたまま泣

いていた。

「いいなあ、ユベール……」

シルヴィはユベールだけが船に乗れることが羨ましくて、指をくわえてその様子を見ていた。何故母親が泣いているのかは分からない。ただ、みんなで賑やかな港に行けることが、嬉しくてしかたなかった。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

第一話・予感（後書き）

次回の更新は20日の予定です。感想・評価お待ちしております。

第二話・記憶（前書き）

突然ですが『機械仕掛けの揚羽蝶』の書籍化を狙っているので削除
します。

第二話：記憶

夜の港は、大勢の人々で賑わっていた。

船を乗り降りする人々。

船から積み荷を運んで、せわしく働く人々。

船着き場までの道には、様々な露店が並び人々が行き来している。シルヴィとユベールはしっかりと手を繋ぎ、はぐれないよう母親と男についていった。

ひげ面の大きな男は、無口で無愛想だったが、船に乗る前に食事を奢ってくれた。

外で食事をするのも、ちゃんとした料理を食べるのも、シルヴィには久しぶりのことだ。シルヴィもユベールも嬉しくて、はしやぎながらたくさん食べた。

大声で笑っても喋っても、母親は何も言わなかった。いつもなら行儀が悪いと叱るのに、その日は優しく微笑んでいるだけだった。

今日はユベールと私の誕生日だからね。

シルヴィはそう思ったが、時々母親が見せる悲しげな表情と、ひげ面の男がユベールとシルヴィに向ける恐いような鋭い眼差しが気がかりだった。

しかし、そんな一抹の不安も、賑やかな露店の道を歩いていると忘れてしまう。

果物や野菜、お菓子、色鮮やかな装飾品。シルヴィは店の品々に目を奪われていた。

「シルヴィ、ユベール。」

途中まで進んで、母親はふと立ち止まり後をふり返った。

「あなた達に何か買ってあげるわ。好きな物を選びなさい。」

「えっ？ いいの？」

ユベールは、母親を見上げて目を輝かせる。

「今日はあなた達の誕生日だもの。何でも買ってあげるわ。」

シルヴィも喜んだ。去年の誕生日は何も買ってもらえなかった。家にお金がないことは分かっていたから、シルヴィもユベールも我慢した。

でも、今年はおじさんにお金をもらったものね。

シルヴィは笑顔で男に視線を移す。男は相変わらず無表情で、その場に突っ立っていた。

親切なおじさん。何故おじさんはわたしたちにお金をくれたのかな？

「シルヴィ、何が欲しい？」

ぼんやりとしていたシルヴィに、ユベールが声をかける。

「え……？ うーん、何にしようかなあ。」

シルヴィはキョロキョロと店を見回した。美味しそうな菓子も魅力的だけれど、何か誕生日の記念になるような物の方が良い。

「あ、あれ、綺麗！」

シルヴィの目に、キラキラと輝く光が映る。その店には、様々なアクセサリーが所狭しと並んでいた。首飾り、指輪、髪飾り。

子供向きではなく、どれも大人の女性向きの品々ばかりだった。

シルヴィは店先まで走り寄る。

特に目を引いたのは、色とりどりの石の粒で出来たブレスレット。シルヴィは食い入るようにブレスレットを見つめた。

「シルヴィ、それは大人用よ。あなたには大きすぎるわ。」

後から来た母親はシルヴィに言った。走って来たユベールも、シルヴィと並んでブレスレットを見つめる。

「わあ、綺麗だなあ。お母さん、僕もこれがいい。シルヴィ、お揃いのブレスレットを買おうよ。」

「うん！ わたし、この桃色にする。ユベールはねえ、この水色がいいんじゃない？」

シルヴィは飾り棚の上から、桃色と水色のブレスレットを取り上げた。

「ユベールにつけてあげる。」

シルヴィはそう言うと、薄い水色の石のブレスレットを、ユベールの細い腕に通す。大人用のブレスレットは大きすぎて、ユベールの腕をクルクルと回る。

「じつして、二重にすれば良いんだよ。」

ユベールはブレスレットを二重に巻いてみた。

「シルヴィにもつけてあげるね。」

ユベールはシルヴィから桃色のブレスレットを受け取ると、同じように二つに巻いて腕につけた。二つの小さな腕でブレスレットが輝く。

「大人になっても持っていようよ。誕生日にはこのブレスレットをつけて一緒にお祝いするんだ。」

「うん！ ずっと大切に持っていようね！」

シルヴィとユベールは笑い合い、ブレスレットをつけた手首と手首をくっつけ合った。その姿を見て、母親は涙をこらえきれず、ハンカチで目頭を押さえた。

「最後の良いプレゼントになったな。あれなら一生大切に出来るだろう……」

震える母親の背に向かって、ひげ面の男は低い声で呟いた。

その後、ユベールは男とともに、外国行きの大きな船に乗り込んだ。デッキで嬉しそうに手を振るユベール。

「お母さん、ユベールはどこに行くの？ いつ帰って来る？」

棧橋で、シルヴィは母親に尋ねる。ユベールは船に乗るといふことしか聞いていない。行き先も帰りも分からない。

「……」

母親は何も言わなかった。ただ黙ってユベールを見つめ、手を振っている。

シルヴィも仕方なくユベールに手を振った。

暗い夜の海。

空には宝石を散りばめたような星が瞬いていた。

やがて、船の出港を告げる警笛が静かな海に響き渡り、

船がゆっくりと棧橋を離れていこうとする時。

母親は突然シルヴィを抱きしめると、声をあげて泣き出した。

「……お母さん？」

苦しいくらいシルヴィを強く抱きしめる母親。

「……許して、許して、ユベール……」

そう言っつて、母親は子供ののように泣きじゃくった。次第にシルヴィにもその悲しみが伝わり、いつしか母親の胸の中で泣いていた。

ユベールは外国に行ってしまう。もう二度とここへは帰って来ない。

幼いながら、シルヴィはそう感じ取った。幸せな誕生日が、悲しみの誕生日へと変わる。プレスレットは、最後の誕生日プレゼント。

シルヴィの腕の石の粒は、夜空の星のように悲しく光っていた。

ユベールは人買いに売られてしまった。

母親には聞けなかったが、時が経ちシルヴィも悲しい現実を知った。

母親一人では、とても二人の子供を育てていく余裕はなかった。

あのままでは、いずれ三人とも飢え死にしていたかもしれない。

ユベールの犠牲で、母親とシルヴィは救われたのだと、シルヴィは思った。

母親を攻めることは出来ない。

だが、ユベールがいなくなってから、シルヴィは毎日ユベールのことを思い、ユベールのいなくなった寂しさは増していくばかりだった。

ユベールは外国で幸せに暮らしているわ。

シルヴィはユベールとお揃いのブレスレットを見つめては、いつも心の中で願っていた。誕生日を迎えるたびに、シルヴィは思う。いつの日か、ユベールと一緒に誕生日を祝える日が来ることを。別れの日、ユベールと交わした約束をシルヴィは忘れない。

今年の誕生日、私はユベールと過ごせるかな？

籠いっばいの色とりどりの花を抱え、シルヴィは港へと向かった。外国から流れてきた兵士達がいる港へは近づかないようにと忠告されていたが、花を売りに行かないわけにはいかない。今なら、いつも以上に人々で賑わっていることだろう。

花を売るだけだもの、気をつけていれば大丈夫よ。

足取り軽く、シルヴィは港への道を急ぐ。外国から来た兵士達に、シルヴィは少しばかり興味もあつた。

予想通り、港は大勢の人々でごった返していた。

物売りの数もいつもの数倍は多くなっている。見慣れぬ外国の兵士達も、たくさん行き来していた。

疲れ切った顔でフラフラ歩いている若い兵士もいるが、中にはほろ酔い気分で若い女を引き連れて歩いている兵士もいる。

派手な服に派手な化粧の町の女達。彼女たちは愛想をふりまき、めぼしい兵士を見つけては声をかけ、べったりと寄り添ってついていく。

彼女たちの目的が何なのかは、シルヴィにも分かるが、彼女たちも生きていくために必死なのだ。シルヴィと同じように……。

「お花はいかがですか？ とても綺麗で良い香りですよ。」

シルヴィは腕を組んで歩くカップル達に、笑顔で声をかける。

「セクシィな彼女には、この赤いバラはいかがですか？」

シルヴィは兵士にバラを差し出す。横の女はニヤリと笑うと、上目遣いに兵士を見上げた。

「おお、いいな。彼女にピッタリだ。」

ほろ酔い加減の兵士は、機嫌良くバラを買う。

「君も花に劣らず美しいよ。」

金を渡しながら、兵士はシルヴィに軽口をたたき、隣りの女に睨まれる。

「あの子はまだ子供よ。早く二人きりになりましょう。」

女は兵士に腕を絡ませ、その腕をグイグイ引っ張る。酔って顔を火照らせながらも嬉しそうな兵士。

去っていく二人の姿を眺めながら、シルヴィはお金を袋へと入れた。見渡せば、至る所に同じようなカップルの姿がある。女好きの兵士達と金目当ての女達。

今日は全部売れそうね。

シルヴィはクスツと笑うと、次のカップルを目指し歩いて行った。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

第二話・記憶（後書き）

次回の更新予定は10月27日です。

第三話・再会（前書き）

この話までで春野天使先生原案の話は終わります。
次話からは完全なる私のオリジナルの展開になります。

第三話：再会

花は次々と売れて、シルヴィの籠の中の花はほとんどなくなった。

来て良かった。危険なことなんて何もなかったわ。

シルヴィはホッと一息つく。この売れゆきなら、明日もまた来てみようと思う。

と、突然、大きな歌声が聞こえてきた。歌声というより、怒鳴り声のような騒音に近い声だ。

前方に目をやると、酔っぱらった兵士達が肩を組み、千鳥足で歩いてくる。

シルヴィは彼らを見無視し、急ぎ足で通り過ぎようとした。

「おっ、花売り娘だ！」

「俺達にも花を売ってくれ！」

酔っぱらい達はシルヴィに目を付けると、行くてを塞ぐように立ちはだかる。

「ごめんなさい。今日の分はもう終わったの。」

シルヴィはしっかりと花籠を抱え、男達を見つめ返す。

「まだ籠の中にあるじゃねえか。」

「花がダメなら、お前でもいいぞ。お前の方が花よりずっと良い。」

「そつだ。お前を買ってやろう！　いくらだい？」

男達はいやらしい目つきでシルヴィを見ては、大声で笑い合った。シルヴィは男達を避け、歩いて行こうとするがグイツと腕を掴まれた。

「小娘じゃあるまいし、いいじゃないか。花を売るよりずっと金になるぞ。」

シルヴィの腕を掴んだ兵士が、ニタリと笑う。

「この町の女はいい女ばかりだが、お前は特に美しいな。」

「放してください！」

引き寄せようとする男の腕を振りきろうとした時、シルヴィの腕から籠が落ちた。

「花なんか放っておけ。俺達と一緒に飲みに行こう！」

落ちた花を踏みつけられ、シルヴィは別の男にもう片方の腕を取られた。

「町の女どもは、金目当てに平気で体を売っているんだ。お前なら他の女より、うんと金を払ってもいいぞ。」

「嫌！　私は彼女たちとは違う！」

シルヴィは踏ん張るが、男の強い力にズルズル引きずられそうになる。

助けて！

恐ろしくて声が出ず、思わず目を瞑った。そのまま男達に連れて行かれそうになった時、誰かの声がした。

「待て！ 彼女は俺と約束しているんだ」

男達の歩みがとまり、シルヴィは別の誰かに体ごと引き寄せられた。

「俺の女だ。」

知らない男の腕の中に抱きしめられたシルヴィは、恐る恐る目を開ける。

男の腕がシルヴィを掴み、その体温が体に伝わる。

男はしっかりとシルヴィを抱いているが、決して乱暴ではない。

「……あの？」

ドキドキしながら男の顔を見上げようとするシルヴィに、男は小声で呟いた。

「大丈夫、俺に任せて。」

酔っぱらった男達は、男を睨み付ける。

「何だと？ 若僧がえらそうに。」

迫ってくる酔っぱらい達に、若い男はポケットから紙幣を差し出

した。

「喧嘩は好きじゃない。この金で飲み直して来いよ。」

「フン……」

酔っぱらいの兵士達は、若者の紙幣を黙って受け取った。

「ま、今回は許してやるか。」

金を懐にしまい込んだ男は、他の男達と顔を見合わず。

「しらけちまったな。また飲み直そうぜ！」

酔っぱらい達は、また大声で歌いながら、フラフラと通りを歩いて行った。彼らの姿が店の中に消えると、若者はサッとシルヴィを放した。

「……あの？」

シルヴィはその場に突っ立ち、若者を見上げた。

優しい目をした金色の髪の精悍な若者。

シルヴィは頬を染めて彼を見つめた。

「ありがとうございます！」

「いや、こっちこそ、いきなり抱きついて悪かった。」

青年は軽く頭をかき、落ちた籠と花に目をやった。

「花は台無しにしてしまつて申し訳ない。」

「あ……」

シルヴィイは慌てて、籠と花を拾つ。男達に踏まれた花は、ぐつたりとなつていた。

「お詫びにその花を全部買うよ。」

若者はシルヴィイが手にした花を見ながら言った。

「え?」

「これから人に会いに行くから、花を買つていこうと思うんだ。」

「でも、この花はもうダメだわ……」

「良しさ。なんなら、少し安くしてくれるといいけど。」

若者が笑い、シルヴィイも微笑んだ。

「それなら、この花は助けてくれたお礼にあげるわ。」

シルヴィイは籠の花を束ねると、若者に差し出した。

「本当に良いのかい? 幸運だな。」

シルヴィイは頷き、花を手渡す。その時、若者の手首で何かが光つた。

「あつ、それは……」

若者の手首に目をやったシルヴィは、驚いて目を丸くする。彼は腕にブレスレットをしていた。

それは、シルヴィとお揃いのブレスレットだ。淡いブルーの石の粒。

「間違いないわ。ユベールのブレスレット……どうしてあなたが？」

シルヴィはじつとブレスレットを見つめ、自分の腕にしたブレスレットを若者に見せる。

「……もしかして、ユベール？ あなたはユベールなのね!？」

驚きが喜びに変わる。シルヴィは目を輝かせ、若者を見上げた。

「……君は、シルヴィ……?」

若者はじつとシルヴィを見つめ返した。

「そうよ、私はシルヴィ……ああ、本当にユベールなのね、嘘みたい。」

シルヴィの青い瞳から涙が溢れ出る。

「ユベール、会いたかった。」

シルヴィはしっかりとユベールを抱きしめる。

後から後から涙が溢れ、シルヴィの頬を濡らしていく。

「母さんが死んで、私、ずっとひとりぼっちだったの……ずっと一人で花畑を守ってきたわ。どんなにあなたに会いたかったか分かる……？」

ユベールの胸に顔を埋めて、シルヴィは体を震わせながら泣いた。ユベールは戸惑いがちに腕を伸ばし、シルヴィの体をそっと包みこむ。

「……海の方こうでは戦争が始まって、若者は皆兵士にとられ戦っているって聞いて、すごく心配したわ。でも、戦争は終わったのよね？ 良かった、あなたが無事に帰って来てくれて。もう、どこにも行かないで……」

シルヴィはゆっくりとユベールの体から離れ、頬を濡らす涙を拭いた。

「帰りましょう、私たちの家に！」

ユベールを見上げ、シルヴィは微笑む。

「どうかしたの、ユベール？」

「え？」

「私と再会したこと、あまり嬉しそうじゃないみたい。」

シルヴィはクスリと笑った。

「あ、いや……あまりに長い間会っていないから、君がシルヴィだと思えなかったのさ。すまない。」

「謝らないで。あの時、私たちまだ七歳になったばかりだったもの。」

シルヴィは自分と同じ青い瞳のユベールの瞳を見つめる。

「あの頃は、私たち背の高さもいっしょだった。でも、今はあなたは立派な青年ね。背だつて私よりずっと高くなって遅しくなつたわ。」

シルヴィはユベールが抱えていた花束に目をうつす。

「その花束、私にくれようとしてたのよね？　ありがたくいただきますわ。」

悪戯っぽく微笑み、シルヴィはユベールから花束を受け取る。

「ついでに市場で買い物をして帰りましょう。今夜はうんと御馳走するわ。」

シルヴィは言いながら、先に歩いていく。

「あ、シルヴィ。」

ユベールは右足を少し引きずりながら、慌てて彼女の後を追う。

「実は……まだ、家の片づけが終わってないから、もう一度国に戻らなきゃならないんだ。」

「そう。こちらにはどれくらいいられる？」

「そうだな……一週間くらいなら。」

シルヴィは片手を伸ばし、そつとユベールと手を繋いだ。

「必ず、また戻ってきてね。」

ユベールを見つめ、念を押すように言う。

「もちろんさ。」

ユベールはクスツと笑い、シルヴィの手をギュツと握った。

「まるで、恋人同士みたいだな、俺達。」

「子供の頃はいつもこうして手を繋いで歩いてたでしょ。ユベール
つたら、すぐに迷子になっちゃうから。」

「そうだったっけ？ それなら、握っててもらおうか。」

二人は顔を見合わせて笑った。

二人並んで通りを歩く。

またこんな風にユベールと並んで歩けるとは、シルヴィは思っ
てもみなかった。

繋ぎ合った手から、ユベールの温もりが伝わる。今まで恋人が出
来たことなんて、一度もなかった。

大人の青年とこうして手を繋いで歩くことも初めてだ。

シルヴィの胸が小さくときめき、頬が早春に咲く桃の花の色に染
まるのを感じ、シルヴィは動揺する。

やだ、ユベールは双子の兄なのに……久しぶりに会ったものだ

から、何だか変な気分になっちゃったのよね。

シルヴィは心の動揺を隠すように、ユベールに話し掛ける。

「足、どうしたの？ 歩きにくそうね。」

ユベールは、ずっと右足を引きずりながら歩いている。

「ああ……戦争の傷跡。まだ、包帯巻いてるけど、もうすぐしたら傷は治るさ。もうすぐすれば……」

ユベールの顔が一瞬曇る。

ユベールは生々しい戦争を体験してきたばかりだ。体の傷以上に深く心の傷も負っているはずだった。

シルヴィの胸が痛む。

「私の美味しい手料理を食べたら、きっと傷も早く治るわよ」

シルヴィが明るい笑顔を向け、ユベールの手を握り返した時だった。

リン……………

鈴の音がシルヴィとユベールの耳に届いたのだ。

リン……………

シルヴィが鈴の音の発信源がどこかを目で追って居た時だった。突如ユベールに異変が現れたのだ。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

第三話・再会（後書き）

次回の更新は来週の土曜日もしくは日曜日の予定になります。

第四話：鈴の音と青年（前書き）

告白します、第四話以降の話の展開に迷っているため次回更新予定は未定です。本当にすみません。

第四話：鈴の音と青年

「ユベール！」

シルヴィの目の前でユベールは、苦悶の表情を浮かべながらその場にしゃがみこんでしまう。

リン……………

リン……………

ユベールはしゃがみこみながら、両耳を手で塞ぎ呻いている。

シルヴィはユベールを一刻も早くこの音から遠ざけ、自宅で介抱したい気持ちでいっぱいだ。

「ユベール立てる？ユベール！ユベール！」

しきりに兄の名を呼ぶが、兄は苦しそうな声を上げるだけでシルヴィには返答しない。

鈴の音は止まらない。

それどころか先ほどより大きく響いている気がした。

「やっぱりな。」

鈴の音より澄んだ声とその主が、シルヴィとユベールの前に現れた。

金色のくせのある短髪に青い両の瞳の青年。

彼の身を包んでいたのは黒いスーツ。

手にはチョコレート色の鞘に収まった剣が握られており、柄頭

には胡桃程の大きさをした銀色の鈴が付属されていた。

「この鈴の音は人間には、ただの鈴の音にしか聞こえない。だが黒妖精ヴェルトにとっては不快極まりない騒音だ。」

「な、何なの！？あなたは一体何者なの！？」

しゃがみこむユベールの傍らで彼の背中をさすりながらシルヴィは問い、視線を鈴の音の発信源である彼にぴったり合わせる。

彼は太陽に照らされたくせのある金色の短髪を耳にかけながら、しゃがみこむユベールを睨む。

「高潔なる金ノーブルゴールド……」

苦しんでいたユベールが僅かに顔を上げながら、声の主の立つ方向に視線を移動しよろよろと立ち上がった。

「その称号は、俺がミュステリオン王国・国王ダゴベール・レイ・ミュステリオン陛下から賜ったものだ。俺をそう呼ぶのは王族の間もしくは黒妖精スヴェルトのどちらかだ。妖精は俺を称号で呼んだりしない。それに妖精アイルヴは死人しびとの身体に憑いたりなんかしねえ、死人しびとに取り憑くのは、黒妖精スヴェルトだけなんだよ！」

ノーブルゴールドとユベールに呼ばれた青年は、目に止まらぬ速さでユベール目掛けて剣を振り下ろした。

「やめてえ！！！」

シルヴィの叫びも空しくユベールは斬られた……かのように見えた。

シルヴィは思わず目を覆った。
自分の家族の命の灯火が消え、周りは鮮血に染まる……
はずだった。

シルヴィはおそろおそろ目を開けると、そこには黙って立ち尽くす自分の兄と太刀を抜刀したままユベールを睨み続ける青年の姿があった。

ユベールは無事だった。
斬られたのはユベールの片頬だったのだ。

ユベールの片頬に切り傷が生まれた。
ユベールの無事が確認できたシルヴィは、傷の具合を確認するためユベールの頬を見た。

「ユベール……あなた、それは……?」

ユベールの片頬から滴り落ちていたのはルビーのように赤い血、ではなくサファイアのように青い青い色をした血。

ノーブルゴールドと呼ばれた青年が手に持っている剣の剣身も青い血が付着していた。

何故、普通の人間であるはずのユベールが青い血をしているのだろう。

何故、ただの鈴にしか聞こえない音に耳を塞いで苦しんでいたのだろう。

シルヴィの頭の中に疑問が浮かんだ。

「これでわかっただろ、お嬢さん。あなたのお兄さんはもうあなた

のお兄さんじゃない。あんたのお兄さんに取り憑いた黒妖精スヴェルトなんだよ、妖精アールグはこんなことはしない絶対に。」

ノーブルゴールドと呼ばれた青年は静かにゆっくりと剣を腰にある鞘へ収めた。

次の瞬間、彼の横を今まで苦しがつていたユベールが物凄い速さで通り過ぎ森の奥へ消え失せた。

舌打ちをする青年とユベールを黙って見送るシルヴィ。

「逃がしたか！だがすぐに………っておい！おい！すっかりしろー！」

シルヴィの意識が混濁し、目の前が揺らいだ。

ユベール………どうして………

身体中の感覚が一つずつ麻痺していくように、何一つ考えられなくなっていく。

シルヴィの両の耳に届くありとあらゆる音が止んでいき、意識は闇の中へ消えた。

「だい………ぶか！しっ………りしろー！」

シルヴィが最後に聞いたのは、ノーブルゴールドと呼ばれた青年の自分を呼ぶ声だった。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

第四話：鈴の音と青年（後書き）

更新予定が決まりましたらお知らせいたします。

第五話：キス（前書き）

遅くなりましたが、第五話スタートです。

第五話：キス

崩れるように倒れたシルヴィの身体を、ジルフォードがしっかりと抱きとめた。

「おい！大丈夫か！おい！」

シルヴィはぐったりとしていた。

身体が燃えるように熱い。

彼女の色白の額からは朝露に似た汗が流れ、苦しさを露にするように呻いていた。

息も荒く肩で呼吸しており、目は固く閉じられていた。

「とりあえず彼女の家へ……」

ジルフォードはシルヴィを抱きかかえると、両の瞳を閉じて意識を集中させる。

静寂がジルフォードとシルヴィを包みこんだ。

「……風の大精霊であるシルフェに仕える小妖精たちよ、今ここに集え。我が行くべき道を教えよ。」

ジルフォードが静寂を破り、凜とした声で唱える。

すると温かい風が、彼とシルヴィを守るように優しく包みこんだのだ。

風はジルフォードの金色に輝く髪を、形の良い耳を撫でる。

「……………そうか。わかった、ありがとう。」

ジルフォードがそう言っていると風はピタリと止んだ。
彼は苦しそうに呻くシルヴィを抱きかかえ直すと、ユベールが消えた森とは反対方向へ歩き出した。

小妖精^{パック}に教えられたとおりの道を行くと、シルヴィの家に着いた。
ジルフォードは早速シルヴィをそつとベッドへ寝かせた。
シルヴィの容態は悪くなる一方で、顔は青白く唇は青みを帯びた紫色に変色していた。

「ユ・・・ベール・・・」

うわ言でシルヴィは兄の名前を呼んでいた。
おそらく兄の夢を見ているのだろう。

「このままだとマズいな・・・」

洗面器に汲んできた水で濡らしたタオルを、優しくシルヴィの額に当てながらジルフォードは呟いた。
一刻も早くなんらかの手当てをしなければ、命に危険が生じることになるだろう。

ジルフォードはふうと息を吐いた。

どうするか・・・

タオルがぬるくなつたため、洗面器の水で再び濡らしながらジルフォードは思案した。

ふとシルヴィの顔を見た。

青みを帯びた紫色になつてしまつて唇と、幾分かやつれてしまつたかのような顔を見た。

その姿は、今は亡きジルフォードの母の死ぬ間際と重なつた。

目の前で何もできず死ぬ姿を見るのはもうごめんだった。

「やむを得ないな。」

ジルフォードは意を決し、ネクタイを緩め白いシャツを脱ぐと、上半身裸になつた。

「……すまない。」

ジルフォードはシルヴィに馬乗りになると彼女の衣服を脱がせ、自分と同じく上半身裸にする。

ためらいがちに、シルヴィの汗ばんだ半身に自分の半身を重ねた。やましい気持ちも下心もあるわけではないが、申し訳ない気持ちにジルフォードはなつていた。

他に方法はない……人肌で熱を吸うだけだ……

シルヴィの形良い乳房の柔らかさと女性らしい匂いを感じ、ジルフォードの心拍数は高鳴つていく。

どうでもよいが昨日きちんと体を洗つておいて良かった、と改めてジルフォードは思った。

「うつつ……うあ……ああ……」

シルヴィに異変が現れた。
痙攣している。

目は固く閉じられ涙を流し、シルヴィは訴えるように呻いた。
異変に気づいたシルフォードは冷静だった。

シルフォードは目を閉じて早口で呪文を唱えると、シルヴィの紫色の唇に自分の唇を重ねた。

魔法を、シルヴィの口を通して流し込んでいく。

これは治癒を施す魔法である。

幼い頃自分が高熱を出した際に父に同じことをしてもらったのだ。
おそらくこれで治癒するだろう、とシルフォードは考えたのだ。

がくがくと動いていたシルヴィの体がしだいに動かなくなり、呼吸をするだけの上下運動をするようになっていった。

シルフォードは重ねていた唇をそっと離し、シルヴィを見やる。

シルヴィの顔から青白さが消えうせており、健康的な肌の色を取り戻しつつあった。

呻かなくなったし、寝息も安らかになっていた。

身体の熱も燃えるように熱かったのが、今はほんのり熱を帯びている程度になっていた。

安心したシルフォードは、シルヴィに衣服を着せるとほっと胸を撫で下ろした。

BLUE BLOOD ~ 二つのブレスレット ~

第五話：キス（後書き）

この続きは第六話で……

BLUE BLOOD ~ 二つのブレスレット ~

第六話：事実（前書き）

連続投稿です。

第六話：事実

シルヴィはゆっくりと目を開いた。

目に映ったのは、今は亡き母の手製である薔薇の刺繍が施された白のカーテン。

木製の天井そして柔らかく包み込むように照らされる灯り。

私の家？

横に首を動かすと、赤と橙色の混ざったような色をした炎が燃える暖炉の前に一人の人物がいた。

金糸を彷彿させるくせのある短髪が炎に照らされている。

シルヴィが声をかけようと体を起こした時だった。

「目が覚めたか？」

凜とした声と共に、暖炉の前にいる人物は振り向いた。

「具合はどうだ？」

人物は暖炉から立ち上がると、シルヴィの寝ているベッドの傍に歩み寄った。

意識がはつきりとする。だがその直後、鈍痛が頭を襲い額を手で押さえる。

「……………」

「無理に身体を起こさないほうがいい。まだ熱が引いたばかりなんだ。」

「熱？」

「お前は熱を出して倒れたんだ。それでここに運んだ。」

シルヴィに一つの疑問が浮かび上がった。

暖炉にいた人物　彼はシルヴィの家の場所を知らないはずだし、シルヴィも教えていない。

近所の人間に尋ねたのだろうか？それとも自ら調べたのか？

憶測を脳内で並べても仕方ないので、シルヴィは彼に尋ねてみることにした。

「どうして私の家を知っているの？」

「ああ、小妖精^{バック}を呼び寄せて聞いたんだ。」

小妖精^{バック}とは、山や川、草や木に宿る自然霊の総称である。

木一本でも生えていれば、例外なく小妖精^{バック}は宿る。

妖精^{アイルヴ}より弱い存在であるため妖精^{アイルヴ}のように人に擬態することはできず、姿を現したとしても手の平大の球状の光にしかかなれない。

性格は恥ずかしがりだが、基本的に人間のことが好きで困っている人間を見ると力を貸してくれるのだ。

しかし人間とは話ができないはずだ、それにも関わらず彼は小妖精^{バック}と話をしたと言う。

シルヴィは彼が何者なのかを知りたくなかった。

「あなたは…何者なの？」

名乗るのを忘れていた、と彼は言った。

「ジルフォード・フローレンス。黒妖精狩人だ。長いからジルでいい。」

ジルフォードはそう言っつて、胸ポケットから何かを出してシルヴィに見せた。

それは手の平大の平べったいバッジであり、高価な銀で出来ていて白い百合の花が象られていた。

白い百合の花はミュステリオン王国の国花。

国花が象られており強い魔除けの力を持つ銀で出来たバッジを持っているということは、王家に選ばれた騎士の証。

「…黒妖精狩人」

「ああ、そうだ。」

黒妖精狩人

それは人間に仇を成す妖精・黒妖精を妖精に打ってもらった武器や妖精の力を借り、黒妖精を殲滅する者。

妖精や小妖精、もちろん黒妖精とも言葉を交わすことが可能であり、人間が住まうミュステリオン王国と妖精の住まうアールヴヘイムの間に入る調停者。

ミュステリオン王国とアールヴヘイムが、人間に害を及ぼし妖精たちを裏切った黒妖精を滅ぼすために同盟を結ぶことが出来たのも黒妖精狩人のおかげ。

黒妖精狩人は、ミュステリオン王国からその活動と業績を認められ騎士の位を国王から授与されている。

無論その話は田舎町ゲインズブルでも知れ渡っていた。

そのため当然のことながらシルヴィも知っていた。

「……シルヴィ・エラクレア。花屋を営んでいるわ。」

知ってる、とジルフォードは言っただけで目を伏せた。

「ゲインズブルへ来る前に調べさせてもらった。あなたのお兄さんのことも。」

その言葉を聞くと、シルヴィはベッドから勢い良く身体を起こした。

「ユベールは!?!ユベールはどこ!?!」

「……シルヴィ、落ち着いて聞いて欲しい……ユベールは……亡くなっているんだ。」

その言葉を聞いたシルヴィは一瞬、目の前が真っ暗になった。だが、すぐに反論する。

「嘘よ!そんなの嘘よ!」

「……本当なんだ。フィアールカ王国で死亡が確認されている。兵士名簿を閲覧させてもらったからわかる。」

「嘘よ!ユベールは、生きていないじゃない!!だって私を助けてくれたもの!!幼い頃母に買ってもらったブレスレットを、薄いブルーのブレスレットを手首に付けていたもの!!そうよ!ユベールは生きているのよ!」

「違う。今のユベールには黒妖精スウェルトが取り憑いている。黒妖精スウェルトが取り

憑いて死んだユベールの身体を動かしているだけだ……！」

嘘だと否定するシルヴィに、ジルフォードは淡々と事実を告げる。否定したい気持ちは痛い程わかる。

家族が、血を分けた兄妹が死んだのだ。身を引き裂かれるような思いがするのは当然のことだ。

「シルヴィ。」

ジルフォードはシルヴィの両肩を掴んだ。

「離して……！」

シルヴィはジルフォードの腕を力強く離すと、ベッドから飛び降りた。

行く先は決まっていた。

ユベールが消えたあの森。

「待って……っ！」

シルヴィを追いかけようとしたジルフォードは、何か強烈な力によつて身体が弾かれてしまった。

次に見た時には、家にシルヴィの姿はなかった。

シルヴィは走った。

森へ向かって走った。

熱の少し下がった身体で走っているため、すぐに汗をかいた。だが、構わなかった。

手首にはいつものまにか桃色のブレスレットが巻かれていた。
桃色のブレスレットは月のない夜にも関わらず、ぼつと光っていた。

第六話：事実（後書き）

次回更新予定は再び未定です。
評価・感想お待ちしております。

第七話：短剣（前書き）

相も変わらず稚拙な文ですが、読んで頂けたら幸いです。もう少しでこの話は終わります。最後までお楽しみに。

第七話：短剣

何が起こったのか。
ジルフォードはすぐに理解した。

タリスマン
魔具

シルヴィが付けていたブレスレットの力に寄って、ジルフォードは弾かれてしまった。
いや性格に言くと、ブレスレットの方からシルヴィの元へ戻ったのだ。

「うかつだった！くそ！」

ジルフォードは黒のジャケットを羽織り、シルヴィを追いかけ森を指して走った。

シルヴィとユベールが持っているブレスレットは魔具だ。タリスマン

それは、黒妖精スヴェルトが作った強力かつ邪悪な魔力を秘めた道具。

決して低位の黒妖精スヴェルトは作るできない。

作ることができるのは、高位の黒妖精スヴェルト。

そんなものを彼らと繋がりのないシルヴィとユベールが持っている理由は一つ。

ユベールを買ったあのひげ面の男・・・彼が高位の黒妖精スヴェルトを送り込んだ刺客だった。

理由まではわからなかったが、彼がシルヴィとユベールを引き裂いたのはわかった。

どこのごいつかは知らねえが、決着は付けてやる。

ジルフォードは怒りに燃えていた。

シルヴィは森の奥にある大きな木の前にいた。辺りをきよるきよると見回し、兄の姿を探す。

「ユベール！どこにいるの！ユベール！」

必死にユベールに呼びかける。

最愛の兄の内耳に響かせるように、シルヴィは叫んだ。

「……………シルヴィ。」

ユベールは大きな木の陰から姿を見せた。

ジルフォードに斬られた頬の傷は消えていた。

彼はシルヴィに優しく微笑みかける。

「ユベール！」

シルヴィはユベールに思い切り抱きついた。

ユベールもシルヴィの背中に腕を回す。
優しく強く、ユベールはシルヴィを抱く。

「ユベール、家へ帰りましょう。もうどこにも行かないで。」

シルヴィは涙を流しながら、ユベールの胸の中で訴える。
すると、ユベールはシルヴィの体を離す。

不思議そうに見つめるシルヴィにユベールはキスをした。

「っん……！」

シルヴィは拒もうと唇を離そうと力を込めるが、ユベールは力強くキスをしてくる。

嫌！私たち兄妹なのに！こんなことしたくない！

シルヴィの青い瞳から涙がこぼれる。

今度流す涙は先ほどのものとは意味が違っていた。

「嫌っ！」

シルヴィがユベールを平手で打つ。

ユベールの頬が赤く染まった。

くつくつと喉を鳴らしながら、ユベールは笑い始める。

「くつくつくつ……ははははははははははっ……！」

その歪んだ笑顔と笑い声に恐怖を覚えたシルヴィは、そつと後ずさりする。

「逃げるなよ、シルヴィ。」

次の瞬間、シルヴィは強い力で首を掴まれた。

首には桃色のプレスレットだったものが、しゅるしゅる音を立てて巻きつけられる。

「い……やつ……!!」

呼吸ができなくなる。

桃色のプレスレットだったものは、怪しく光りながらシルヴィの呼吸を妨げていく。

「さあ、俺の言うこと聞いてもらおうか。可愛い我が妹よ。」

ユベールの歪んだ笑顔を最後に、シルヴィの意識は闇へと消え失せた。

シルフォードは、森の奥にある大きな木の前にたどり着いていた。辺りは静まり返っていた。風の音すらシルフォードの内耳には入ってこない。

月の出ていない夜にこの静寂さは、不気味としか言いようがなかった。

リン………

リン………

ジルフォードは、柄頭に付いている銀の鈴を鳴らした。

この音に反応を示す人物が自ら出て来てくれるのを、待っていた。

ザザツ……

背後から聞こえた物音の先に、苦しみ呻く人物が出て来た。

ユベール。

ジルフォードの思惑通り、ユベールが現れた。

彼の左手首には、薄いブルーの小さな石で出来たブレスレットを身につけていた。

ブレスレットは淡く光っており、ジルフォードとユベールの顔を照らしていた。

「待っていたよ、スウェルトハンター黒妖精狩人高潔なる金ノーブルゴールド」

「ユベール！シルヴィはどうした？」

「どうしたと思うっ？」

答えないなら、と口にしたと同時にジルフォードは拳を固めてユベールに殴りかかる。

ユベールはジルフォードの拳を掴む。

だが跳ね返すことは出来なかった。

ジルフォードの羽織っている黒いジャケットは、どんな魔力も封じる力を持っている。

先程シルヴィに跳ね返されたのは、ジャケットを脱いでいたからである。

ジルフォードの拳は力強く掴まれ、振りほどこうとしても振りほどけない。

「くくくつ、愚かなり。高潔なる金」
ノーブルゴールド

ユベールが歪んだ微笑みを見せると彼の背後から、緑と茶の色をした無数の植物の枝がジルフォードの手足や首に絡みついてくる。

「くつ・・・」

「さあ、どうする！高潔なる金」
ノーブルゴールド

ジルフォードの身体は、枝により拘束され十字架を模した形になっていた。

浅はかだった。

彼は黒妖精
スヴェルト
アールヴ
スヴェルト
妖精と黒妖精の共通の配下である植物を自由自在に操るのは造作も無いこと。

「でも、君を殺すのは僕じゃない。」

ユベールは指をパチンと鳴らした。

ユベールの後ろから人影が現れる。

ジルフォードは目を見開いた。

「シルヴィー！」

ジルフォードはシルヴィーに呼び掛ける。

だがシルヴィーはジルフォードの呼び掛けには答えない。

シルヴィーの青い瞳はくすんだ色になっている。

首には桃色の小さな石が巻き付いていた。 桃色の小さな石はぼ
うっと光っていた。

ユベールに何かされたのだと、ジルフォードは感じ取った。

「さあ、シルヴィー。 愛しい兄様の言うことを聞いておくれ。」

シルヴィーは衣服のポケットから銀色に光る短剣を取り出した。

「シルヴィー！ユベールの言うことに耳を貸すな！シルヴィー！」

シルヴィーはジルフォードの言葉には反応しない。

くすんだ色の瞳をしたシルヴィーは、ユベールに操られている。

「シルヴィー！」

ジルフォードの再度の呼び掛けに答えず、シルヴィーはジルフォードの心臓目掛けて走っていく。

「さあ、我が愛しい妹よ！我らを邪魔する狩人を消すのだ！」

シルヴィーは、ジルフォードの心臓に短剣を突き刺した。

第七話：短剣（後書き）

次回更新予定は再び未定です。更新予定が決まりましたら、お知らせいたします。評価・感想お待ちしております。

第八話・兄と妹（前書き）

もう少しで二つのブレスレットという話は終わりを迎えます。

第八話：兄と妹

「ふっ！ははははははははははっ！やったぞ！スヴェルトハンター黒妖精狩人を殺したぞ！
ははははははははははっ！」

ユベールは声高らかに嘲笑う。

その声を聞いたシルヴィは、正気に戻った。

自分の手には銀色に光る短剣が握られている。

私は一体何を……………

傍らには木の枝に拘束され首を前に垂れてるジルフォードがいた。

「ま…さか、私が。」

「そうだよ！シルヴィ！よくやった！悪い奴をこの手でやっつけた
んだよ！」

興奮気味にシルヴィに駆け寄るユベール。

シルヴィの身体が、震え出した。

言い知れぬ恐怖と罪悪感が、シルヴィを支配する。

自分を助けてくれた人物をこの手で殺してしまった。

「いや…………いやああああああっ！」

シルヴィは絶叫した。

ユベールはシルヴィの絶叫を聞くと更に嬉々として自分の妹を抱
き締めた。

がっくりとした様子のシルヴィは、笑顔のユベールに答えること

なく抱き返そうとはしなかった。

私の兄は何をそんなに喜んでいるのだろうか……？

シルヴィはぼんやりと心に浮かんだ疑問を誰にも投げ掛けることができずにいたまま、兄に抱き締められていた。

どすっ

鈍い音と共にユベールに異変が起こった。

見るとユベールは白目を剥き、口角から透明な液体をだらしなく垂れ流している。

シルヴィは兄が怖くなり、彼から身体を素早く離し後ろに退いた。ぐらぐらと壊れた振り子時計のように揺れるユベール。

次の瞬間、彼は既に亡き者であるはずの人物の足によって後ろにあつた木の幹に叩き付けられていた。

幹に後頭部を叩き付けられてしまったユベールは意識を取り戻し、苦い顔で自分に攻撃した人物を睨みつけた。

「高潔なる金……ノーブルゴールド 確か死んだはず。」

「ばあか！よく見て見る。」

高潔なる金……ノーブルゴールド ジルフォードが顎で指した先を見ると、木の枝に拘束されているのはジルフォードではなく丸太だったのだ。

こうなったら俺の手で、と剣を振りかざしたユベールをジルフォードは軽やかに躲した。

まるでダンスのステップでも踏んでいるかのような鮮やかで洗練された動きだった。

ユベールの剣を躲したジルフォードは、自身の剣を鞘から抜くと

ユベールの懐に飛び込んだ。
ユベールの剣よりも早く、ジルフォードの剣がユベールの腹を切り裂いた。

「ぐああ……………」

ユベールの手から剣が滑り落ちた。
再び白目を剥いたユベール後ろに反って倒れた。
ユベールの切り裂かれた腹の傷から黒煙が上がった。

「うつ……………」

何かを発酵させたような濃厚かつ胃がおかしくなりそうな強烈な匂いにシルヴィは両手で鼻と口を塞いだ。

黒煙が薄れ、何者かが姿を現す。
目は猫のようで鼻と耳がとがっており、小麦色の肌をした者が現れたのだ。

うんと美しいわけではないが特別醜いわけでもない、どこことなく半端な容姿をしたその者は大きく裂けた口と牙のような鋭い歯を見せ今にも噛み付きそうだった。

それは紛いもなく黒妖精スヴェルトだったのだ。

「ヒヤハハハハっ！バレちゃあ仕方ね…」

きゃあとシルヴィが声を上げた。
当然である。

ジルフォードはその者の首を撥ねたのだから。
首を撥ねられた黒妖精スヴェルトは、あっという間に粒子と化して消えた。

瞬く間の出来事。

ジルフォードは剣に付着した青くどろりとした血を、布で拭き取った。

後に残ったのは、動かなくなったユベールだった。

「ユベール。」

シルヴィは動かないユベールにゆっくりと歩み寄った。腰を落し、ユベールの青白い頬を手で触ってみた。

「…冷たい。」

体温が無いのを改めて実感させられたシルヴィは、涙が溜まった瞳を拭って立ち上がった。

「ここでユベールは死んだんじゃない、ユベールはファイアールカから引き揚げてきた時に亡くなった……ってことにしなきゃね。」

ジルフォードは一瞬驚いた表情を見せたがすぐに呪文を唱え風属性の妖精アールヴを召喚した。

風属性の妖精アールヴは、腰まで伸びている蜂蜜色の髪をした女性の姿をしていた。

ジルフォードは妖精アールヴに、ユベールの遺体を波打ち際まで運ぶことと遺体の傍らに適当な小舟を一艘浮かべておくことを命令した。

了解した、と風の妖精アールヴは言う。ユベールの遺体を抱き上げて消えた。

「あなたも適当な理由を付けて後から来て。」

足早にその場を後にするシルヴィの腕をジルフォードが掴んだ。

「大丈夫か？シルヴィ。」

「平気よ、明日は思い切り泣けるもの。」

「…死ぬなよ。」

「死んだらユベールに怒られちゃう。」

振り向いたシルヴィの笑顔は今にも泣き出しそうだった。
見ているのが辛くなったジルフォードは、視線を月のない夜の空へ移した。

「また明日ね、騎士様。」

「……ああ、また明日。」

ジルフォードはシルヴィの腕を自由にした。
シルヴィは家路を急ぐため、走っていった。
ジルフォードはシルヴィの姿が見えなくなるまで彼女を見送った。

シルヴィの脳裏は、元気だったところのユベールで埋め尽くされて

いた。

一緒にかくれんぼをするユベール。

一緒にかけてっこをするユベール。

好きなおかずを取り合いになるユベール。

迷子になって泣くユベール。

ユベールの生き生きしていた表情が脳裏に浮かぶ度に、シルヴィの瞳から涙があとからあとから零れて頬を濡らした。

決して裕福ではなかったけれどユベールや父母と共に過ごした日は、シルヴィにとってかけがえのない宝物だった。

ばんっ

家のドアを勢いよく開け放ったシルヴィはよろよろとベッドに歩み寄ると、顔を伏せたまま嗚咽した。

泣いたまま一睡もせずシルヴィは朝を迎えた。

どんどんどん！

家のドアを叩く音でシルヴィは意識を覚醒させた。
急いで顔を洗ったシルヴィを隣に住む中年女性が出迎えた。

「シルヴィ！大変だよ！大変だよ！お、落ち着いて聞くんだよ！今港で死体が揚がったんだ！発見したのは王国の騎士様だつてさ！その死体なんだけどね……あんたのお兄さんかもしれないんだよ！すぐに確かめに行きな！一緒に行つてあげるから早く！」

大きな声で泣きたい気持ちを落ち着かせながら、シルヴィは中年女性と共に港へ向かった。

第八話：兄と妹（後書き）

次回更新予定は再び未定です。ですが12月中には更新しようと思えます。

引き続き評価・感想よろしくお願いします。
作者の栄養となります故。

BLUE BLOOD ~ 二つのブレスレット ~

第九話：青い血（前書き）

次話で最終話です。

第九話：青い血

港には、沢山の人々が集まっていた。

シルヴィと中年女性は人の波を掻き分けながら、早足で前に進んでいく。

「ちょっと！通しておくれよ！シルヴィ！シルヴィ！」

中年女性が手招きをする。

シルヴィは足取りが重くなるのを必死で耐えると、歩を進めた。そこには、遺体となったユベールと黒いスーツを着たシルフォードがいた。

「ああ、ユベール！ユベールじゃないか！何て可哀相に！こんな姿になっちまってえ！」

中年女性は身内であるシルヴィより先に泣き始めた。

ユベールの遺体に寄り添い、おいおいと声を上げ中年女性は泣いた。

シルヴィも遺体に寄り添い、体温の無くなった頬に触れながら、声を上げて泣いた。

シルフォードはそんな二人を、悲しそうな瞳で見つめていた。

中年女性とシルヴィの泣いてる姿につられたのか、シルヴィたちを囲んでいる人々の中からもすすり泣く声がちらほらと聞こえてきた。

この場が悲しみに包まれていた。

「あんたが見つけてくれたのかい？騎士様。」

「はい、この近くで黒妖精スヴェルトを狩っていた時にこの方を見つけました。」

すると中年女性はジルフォードを睨みながら、彼に掴みかかった。

「おばさま！」

「シルヴィー！黙ってな……あんた騎士の癖して戦争も止められないのかい！？」

「俺は黒妖精スヴェルトハンタースヴェルトです。あくまで黒妖精を狩るのが俺の仕事です。騎士であっても他国の戦には関与できないんです。」

周囲でブーイングが起こった。

中年女性の意見にそうだと賛同する声が増えていく。

「やめてください！！！」

シルヴィーの声に、周囲のブーイングがピタリと止んだ。
シルヴィーはもう一度、やめてくださいと静かに言った。

「……兄は、黒妖精スヴェルトに取り憑かれていたんです。それをここにいる騎士様が退治なさって下さったんです。」

シルヴィーの突然の告白に周囲からざわめきの声上がる。
中年女性も目を見開いてシルヴィーを見る。

「兄は一度帰ってきました。私の元に。でもそれは黒妖精スヴェルトが兄の振りをしていただけだったんです。本当は兄はフィアルカで既に命を落としていたんです。そこに黒妖精スヴェルトが取り憑き、兄になりすまし

て私を殺そうとしたんです。それを、ここにいらっしゃる騎士様が助けて下さったんです。騎士様は何も悪いことはしてません。ですから、ここにいらっしゃる騎士様を責めないで下さい。お願いします。」

シルヴィが深く頭を垂れた。

誰からもブーイングの声は上がらなかった。

やがてバツが悪くなったのか、周囲の人々は去ってしまい後に残されたのはシルヴィ・中年女性そしてジルフォードであった。

明朝。

ユベールの葬儀はしめやかに行われた。

葬列者はシルヴィ・中年女性・ジルフォードの三人で取り行われた。

ユベールは眠ったように安らかな死に顔をしていた。

まるで今にも目を覚ましそうな顔をしていた。

「シルヴィ、これ。」

ジルフォードがシルヴィの手に何かを置いた。

それはシルヴィのブレスレットとユベールのブレスレットだった。ブレスレットはすっかり直っており、陽光に照らされて桃色と薄いブルーに光っていた。

「呪力はもうない。俺の鈴の音で浄化しておいた。」

シルヴィはユベールの右腕に薄いブルーのブレスレットを、左の腕に桃色のブレスレットを着けてあげた。

「さようなら、兄さん。」

シルヴィの声を合図に、ユベールが横たわる棺が閉められ、土に埋められていく。

徐々に土で見えなくなるユベールを最後まで見ていられなくなつたシルヴィはその場にしゃがみこみ、声を殺して泣いた。

とめどなく流れ出る涙は、シルヴィから生きる気力を剥ぎ取っていくようだった。

やがて土は埋め終わった。

スコップを手にしていた中年女性は何かを悟り、シルヴィとジルフォードの二人きりにして、静かに去った。

「一人にして。」

シルヴィの肩に触れようとしたジルフォードに、彼女は言った。わかった、でも近くにはいさせてくれとジルフォードは言った。シルヴィはゆっくりうなづいた。

「ありがとう、ジル。」

去り際のジルフォードにシルヴィは感謝の言葉を述べた。

ジルフォードはユベールの墓標からそう遠くない木に腰をかけ。墓標でうずくまるシルヴィを見守っていた。

シルヴィの涙は枯れることを知らず、流れ続けた。

日が西に傾いた。

それでもシルヴィイは墓標から離れようとはしなかった。
見かねたジルフォードは、シルヴィイに駆け寄りジャケットをかける。

「風邪引くぞ。シルヴィイ。」

「いい。」

「よくない。」

「いいのよ!! 私一人ぼっちになってしまった! 独りになってしまったのよ!!」

さくっ

何かをそつと切り裂くような音がシルヴィイの耳に届いた。
見るとジルフォードの人差し指から血が流れ出ている。
その色はジルフォードとシルヴィイと同じく青い色。

「どっ…いじつと…?」

「俺、妖精アイルヴと人間のハーフなんだ。俺にもいたんだ、双子の妹が。生きていたらシルヴィぐらいだな。俺の妹は黒妖精スヴェルトに殺されたんだ。」

「思いもよらない告白に、シルヴィは戸惑いを隠せない。

「思考回路がうまく回転しない。」

「辛い過去を何故自分に告げるのだろうか。」

「俺、黒妖精狩人スヴェルトハンターになってから例え命を落としても妹の仇を取りたいって思っていた。でも今は違う。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィを守りたい、シルヴィを守って生きていきたい。シルヴィを残して死にたくない。今は心からそう思える。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「シルヴィが好きだ。」

「嫌いでもかまわない。たとえシルヴィが嫌っても俺はシルヴィを守る。」

「……守るって言ってもあなたは行ってしまっただけでしょう？そんなの嫌！」

シルヴィはジルフォードの背中に腕を回す。
力強く、離さないで、と訴えるかのように。

「離さないで、どこにいても私のことを愛していて。それができないならこの腕を振り払って。」

ジルフォードはシルヴィの身体から自分の身体を僅かに離すと、
シルヴィの首筋に耳たぶに優しくキスをしていく。

離さない。

シルヴィの内耳に甘く澄み切った声で、ジルフォードは言った。
そして二人は溶け合うかのように抱き合った。
優しく、強く。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

第九話：青い血（後書き）

投稿予定は未定です、あしからず。

BLUE BLOOD ~二つのブレスレット~

最終話：あなたを待たせて（前書き）

だいぶ遅れましたがこれで最終話です。

最終話：あなたを待たせて

古いヨーロッパ調の家具が並んだ部屋。

人間が流す血のような赤を基調としており、同色のインテリアが置かれている。

小さなチヨコレートブラウンのテーブルの上に置かれた青いキャンドルには、小さな青い炎がゆらゆらと揺らめいていた。

そこには二人の人物。

一人は背もたれのゆつたりとしてふかふかな椅子に腰掛け、一人は椅子の前で跪いている。

青を混ぜた銀色に輝くくせつ毛に、蝙蝠のついた小さいハットがちょこんと乗っていた。

「つまり、君は失敗したってことだね。」

幼さが残るいやわざと残している声で、彼　ルシファーは跪く人物に問うた。

「いや！もう少し！もう少しで憎つき黒妖精狩人^{スヴェルトハンター}を始末することができたのですが……」

跪いていた彼　バシアヌスが立ち上がり、ルシファーに言い訳を並べている。

元タルシファーの命で、ブレスレットをシルヴィとユベールに買わせようと港の売人たちと話をつけ、二人に買わせることまではできた。

その後ブレスレットの呪力で、シルヴィたちをエサに黒妖精狩人^{スヴェルトハンター}をおびき寄せシルヴィ・ユベールもろとも殺す。

その予定だったが、シルフォードが持つ剣についた鈴のせいであ

力を失い、シルヴィもろともジルフォードを殺すことはできなかった。

「しかし！ユベールは殺すことができました！」

「それはお前の力じゃない。戦で死んだだけじゃないか。」

バシアヌスの背中に冷たい汗が伝っていく。

ルシファアは先ほどから変わらない無表情だが。声は怒りに満ちていた。

容姿は少年にしか見えないが、彼はバシアヌスの何倍何百倍と年を重ねている。

ここにいるルシファアは人間ではなく最高位の黒妖精^{スヴェルト}。

最高位の黒妖精^{スヴェルト}七人。七大伯爵と呼ばれている内の一人。

バシアヌスは、これから自分の命がどうなるのか気がかりになっていた。

「ルシファア伯爵様、これから自分はどうすれば……」

どすっ

バシアヌスが言い終わる前に、バシアヌスの心臓に短剣を刺した。

「君はもういい。役に立たないことがよくわかった。二度と僕の前に姿を現すな。」

こうしてバシアヌスは速やかに自らの生涯を終えたのである。

「エラクレアの双子が使えなかったか…… 次の手はどんな手がお望
みかい？高潔なる金そして風の王」
ノーブルゴールド キングオブザウインド

ルシファアは顎に手を当てて、ほくそ笑んだ。

朝が来た。

窓から白い陽光が差し込んできた。

目覚めたシルヴィは隣を見やると自分の隣に寝ていたはずのシル
フォードがいなかった。

シルフォードがそこに寝ていたことを掛け布団の温もりが教えて
くれた。

「おはよう、シルヴィ。」

「おはよう、ジル。」

シルフォードの手には湯気が立ったマグカップが二つ握られてい

た。

ジルフォードは片方をシルヴィに手渡した。
アールグレイの良い香りが湯気を通して伝わってきた。

「悪い。キッチン勝手に使わせてもらった。」

見ると木製のテーブルには、湯気が上る朝食のメニューが並んでいた。

どれもこれもおいしそうだ。

「おいしそうね、食べましょ。」

朝食を食べ片付けをした後、ジルフォードは仕度を終えて玄関に立っていた。

「月に一回いや二回は会いに来るようにするから。」

「ええ、待ってるわ。来る時は手紙で連絡してね。」

二人は誰からともなくゆっくりと唇を重ねた。

「生きて!どんな目に遭っても生きて!」

シルヴィはジルフォードを抱きしめた。
ジルフォードもシルヴィの背中に腕を回した。

「ああ、生きるよ。生きてお前を抱きしめる。」

簡素な部屋から響く叫び声があった。
どこかに甘みのある美声の持ち主が叫ぶ声だった。

「嫌だああああああっ！」

「我慢しな、脱走しようとした罪は重いのだよセイロン君。」

「注射は嫌だっって言ってるじゃないかああああああっ！」

美人女医アリオーシュは包帯だらけのセイロンの身体に馬乗りになっっている。

片手には人参程の大きさと太さの注射器がしつかり握られていた。アリオーシュの表情は冷たく張り付いた笑顔であり、見る者を恐怖へと誘う。

セイロンはまさに恐怖に誘われており、声を出して叫んではみることの身体はぴくりとも動かない。と言うより動くことができない。

「これから注射するんだから、動くんじゃないよ。」

「嫌だつてばあ！やめてやめ……………うううううううう……………！」

「……………ただいま。親父、アリー先生、何やってるんだ？」

ジルフォードは呆れ顔だ。

無理もない。

セイロンは半泣き状態。

アリオーシュは涼しい顔でセイロンに馬乗りになっている。

ちよつと角度を変えたら破廉恥な光景にも見えかねない。

セイロンとアリオーシュは声を揃えて「お帰り。」とジルフォードに言った。

ジルフォードは少し俯き加減で「ただいま。」と二人に言った。

アリオーシュはセイロンの身体から離れると、席を外した。

ジルフォードはゲインズブルで起こった事をセイロンに報告した。

タリスマン
魔具のこと。

スウェルト
黒妖精に取り憑かれたユベールのこと。

妹のシルヴィのこと。

その他のことを順序立ててセイロンに報告した。

「それで？ブレスレットを売った奴はわかった？」

「ああ。それなんだけど売ったのはゲインズブルのアクセサリー商人だった。売った奴に聞いたら黒妖精スヴェルトは知らないって言ってたしそいつの周辺にも黒妖精スヴェルトの関係者はいなかった。だが売らせた奴がいたんだ。」

「誰？」

「バシアヌスって男だ。さっき話した双子の兄を買った人買いでもある。そいつを見つけ出して調べれば。」

セイロンはジルフォードを抱きしめた。
彼の金髪をいとおしそうに撫でる。

「よく頑張ったね、一人で大変だったのに。」

「や、やめる親父。照れるだろ。」

「じゃあもつと照れるー！」

セイロンは息子の頭をこれでもかと言うくらい撫で回した。
ジルフォードは恥ずかしそうに顔を赤らめた。
その様子をそつと影でアリオーシュは見守っていた。

一年後……

「じゃあ、行ってくる。」

「行ってらっしゃい。」

今日はユベールの命日。

白い百合の花束を大事そうに抱えてジルフォードはゲインズブール行きの船に乗った。

墓石が立つ丘で愛しい恋人を待たせて……

BLUE BLOOD ~ 二つのブレスレット ~

最終話・あなたを待たせて（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます。

広告募集中

小説関連広告に最適です。

出版社や印刷会社はもちろん、
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8115c/>

BLUE BLOOD ~二つのプレスレット~

2008年8月29日19時20分発行